

聞いて見ましょう

酒々井の伝説を訪ねて

平成5年5月16日（日）

酒の井

酒々井町郷土研究会
共催
酒々井町教育委員会

酒々井町文化協会 後援

—酒々井の伝説を訪ねて—

あの山のほら穴にも、落ち葉にかくれたわき水にも、そしてこの石にも、あんな話がこんな話が……。緑の風の中、ゆっくりのんびり歩いたら酒々井の昔むかしが見えてくる。

《コース》

酒々井町中央公民館—勝蔵院（信玄公の首がついたお不動さま）—円福院（酒の井）—古松碑（八抱えの松）—下り松（百とらず）—カンカンムロ（巖島山の隠れ里—椀貸し伝説）—千葉さま茶井戸—巖島の弁天さま—吉祥寺（摩三郎石・乳の井）—隣保館（昼食）—清光寺（家康と無算和尚）—五良神社（鎌倉権五郎と桜の樹）—文殊寺跡（五色の花の咲く桜・天狗の話）—中央公民館

【お話その1】 信玄公の首がついたお不動さま—勝蔵院（地図の2）

朱塗りの仁王門をくぐると、ほの暗い本堂の中に大きなお不動さま（像高1.3m）が辺りをにらんでいらっしゃいます。このお不動さまは、江戸時代の初め堀田正信公が佐倉のお殿様であった時（1651～60）、成田のお不動さまに多くの人がお詣りするので、こちらにも人を呼ぼうと江戸の仏師に造らせたものです。その時この仏師は、甲斐の国からも武田信玄公の像を頼まれていました。いよいよ首をつける時になって、お不動さまの首を信玄公に、信玄公の首をお不動さまにつけて信玄公の髪の毛を植えてしまいました。よくよく見ると本当に怖い顔をしていて普通のお不動さまとはよほど違っていています。「成田の姉不動」と呼ばれたこのお不動さまは、あまり参詣人もなく、お殿さまのもくろみはずれたようです。（『古今佐倉真佐子（ここんさくらまさご）』より）

当時、このお不動さまは東台（今の中央台三丁目あたり）の地にありました。元禄年間（1688～1704）に佐倉のお殿様であった戸田山城守忠昌の奥方さまが重い病いにかかりました。あちらこちらから有名な医者呼び、あらゆる手をつくしましたが少しも効き目がありません。ある夜、夢に「酒々井の不動に祈願すれば治る」とのお告げがありました。東台にあったささやかな不動堂を探しあて、今の馬場の地に移し祈願したところ、三七日（さんしちにち）（21日）目にはすっかり元気になりました。お殿さまは大いに喜んで立派な不動堂を建立されたということです。（『印旛郡誌』より）

※ なお『酒々井町史』編さんのための資料調査の時、深山武夫さん宅で見つかった文書によって、勝蔵院を寄進したのは、戸田山城守忠昌ではなく、子どもの能登守忠直であること、元禄 12 年（1699）1 1 月に着工し、同 13 年 4 月に完成したことが分かりました。

【お話その 2】酒の井—円福院（地図の 2）

昔むかし後冷泉天皇の天喜年間（1053～58）の頃、この地に年老いた父母と貧しいけれど大変親孝行な息子が住んでいました。父親はお酒が大好きでしたので、親思いの息子は朝から晩まで働いて、貰ったお金でお酒を買って帰り、父親の喜ぶ顔を見るのを楽しみにしていました。

ある日、お酒を買うお金がどうしてもつくれず、父親を喜ばせることができないことを嘆きながら帰ってきますと、道のかたわらの井戸からお酒のよい匂いがしてきます。不思議に思って飲んでみると、どうしたことでしょう、本当のお酒です。大喜びで汲んで帰り父親に飲ませました。それからは毎日、この井戸から汲んだお酒で父親を喜ばせ航行することができました。

このことを伝え聞いた人たちは、孝行息子の真心が天に通じたのに違いないとほめたたえ、この井戸を酒の井とよぶようになりました。そして記念に井戸のそばに碑を建て、村の名も酒々井と改めたということです。（『印旛郡誌』より）

※ これに似たお話は酒々井の近くでは栄町酒直、佐倉市直弥などにもあり、また全国各地にもありますが、少しずつ違ったところがあります。大きく分けると

- （1）孝行息子が酒の湧く井戸や清水を見つけ、父親（あるいは母親）に飲ませるといもの（養老伝説）、（2）酒好きの父親が、酒を買うお金もないのに毎日酔って帰ります。不思議に思った息子があとをつけると、清水を飲んでいい気持ちになっています。ところが子供が飲んでもただの水だったといもの（子は清水・強清水）に分けられます。（1）では岐阜県の「養老の滝」の話がよく知られていますが、酒々井の話もこれに含まれます。（2）には栄町や佐倉、山梨県上九一色村の話などがあります。

【お話その 3】八抱えの松—古松碑（地図の 4）

むかし、ここに大きな松の木がありました。樹齢七、八百年ほどで、高さは百尺（約 33 尺）もあり、幹の太さは、大人八人が手をつないでやっと抱えられたほどの大きなものでした。その根元に「妙見さま」が祀られていましたので、御神木とし

て大切にされていました。その立派なことは、江戸時代終りの安政5年（1858）に発行された『成田名所図会』で偲ぶことができます。ところが、天保年間（1830～44）にこの松に雷が落ち、元気がなくなってしまいました。そして、明治2年、大風が吹いたときついに倒れてしまったので村のひとたちはこの松のことを永く忘れないように「古松碑」を建てたのです。

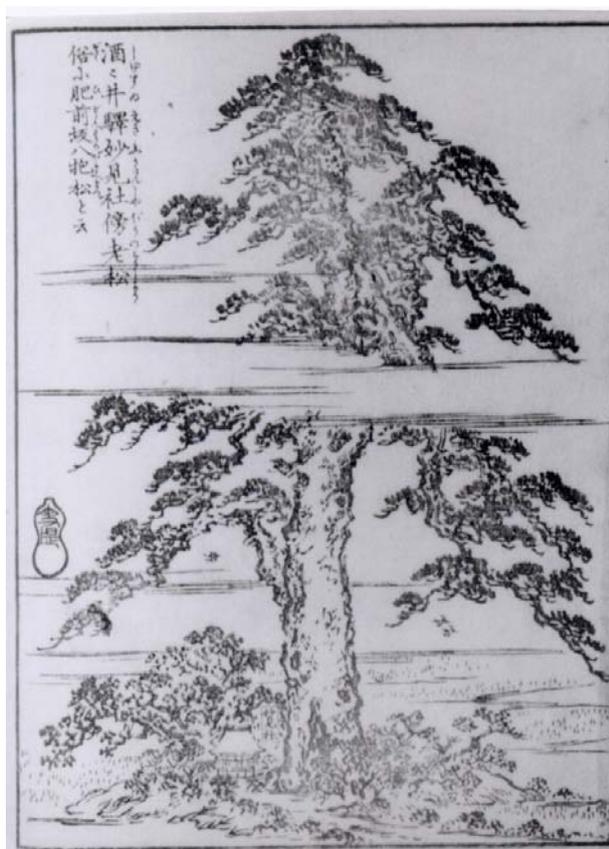
（『印旛郡誌』より）

※ 本佐倉に千葉氏の本城があったころ、このあたりは千葉氏の有力な家来達の屋敷がならんでいました。いまでも小学校のプール付近は「肥前やしき」、その前から根古谷方面へ下る急な坂を「肥前坂」、下宿青年館のあたり

は「右京やしき跡」とよばれています。この松は、「酒の井」の時代からあったことになりすから、もしかしたらお酒が湧いたと人々がうわさをし、おおさわぎしているのも聞いたかも知れません。千葉氏の時代には、よろい兜に身をかためた侍たちがお城へ急ぐのも見たでしょうし、江戸時代になると酒々井は成田街道の宿場として賑わったので、この松の下でひと休みした旅人たちからいろいろな国の話をきいたことでしょう。

【お話その4】百とらず一下り松（地図の5）

酒々井小学校から成田の方に300ほど行くと長い下り坂になりますが、この辺りは「下り松」とよばれています。今でこそ国道51号になり、車の往来の激しい所ですが、昔は道が細く曲がっていて、両側には樹々がおおいかぶさるように茂り、昼なお暗いところでした。しばしば追剥ぎが出て、日が暮れると人の行き来も途絶えてしまいます。ある夕方、貧しい暮しの若者がやむにやまれぬ用事でここを通り



八抱えの松（『成田名所図会』）

かかりますと、道端に百文のお金が落ちているではありませんか。「ありがたい、これは神様が救ってくれたのだ」と拾おうとして、ひょいと脇を見ると、なんと首がぶら下がっていたのでびっくり仰天。百文を拾うどころでなく、そのままうしろも見ずに逃げ帰ってしまいました。その話を聞いた人たちが誰いうとなく、この場所を「百とらず」と呼ぶようになったということです。（『印旛郡誌』より）

【お話その5】 巖島山の隠れ里—カンカンムロ（地図の6）

新堀から突き出た小高い山は、巖島山と呼ばれています。ずうっと昔は、印旛沼がすぐそばまで広がっていました。巖島山の頂上には、弁天さまと住吉さまが祀ら



カンカンムロ

れていて、清々しい空気がただよっていました。そして、この山の中腹には七つのほら穴があいていて、この中には尊い神様が棲んでいると伝えられ、「巖島山の隠れ里」とよばれていました。村の人たちが婚礼や弔いなどの人寄せの時、このほら穴の前で「お椀や皿を10人分貸してください」と頼みますと、不思議なことに翌朝には頼んだ人数分の立派な椀皿がきちんと揃えられていました。村の人たちは、これらを大事に使ったあと、お礼をいってほら穴の前に返しておくのでした。

ところがある時、村の長者が沢山のお椀や皿を借りたのですが、欲深か心がでて返しませんでした。それからは、もう誰がどんなに頼んでも貸してもらえなくなりました。ただその声だけが、ほら穴の中にカーンカーンとこだまするので「カンカンムロ」とよばれるようになりました。（『印旛郡誌』より）

※ この椀貸し伝説も全国各地にあります。近くでは栄町竜角寺にある岩屋古墳や佐倉市上勝田（古墳）にもあります。その伝説の舞台は川、池、淵、沼、ほら穴や塚、古墳、岩などがあります。川や淵など水にかかわりのあるところでは、貸し主はその主である竜神、乙姫、河童、大蛇などといわれていますが、塚やほら穴などでの貸し主はネズミという伝承が多く、昔話の「鼠の浄土（おむすびころりん）」につながるものがあります。これらの場所は、水の底にある竜宮や地の底などの異郷への出入り口と考えられ、こうした異郷から富や幸せがもたらされるという信仰から生れたものと思われま

このカンカンムロのほら穴は、7世紀ころに死者を葬るために営まれた横穴と

呼ばれる古墳の一種で、昭和 22 年にそのうちの一基が発掘され、見事な銅椀をはじめ勾玉、鉄刀、須恵器などが出土しています。

なお、酒々井町、栄町、佐倉市の「椀貸し伝説」がいずれも「酒の井伝説」とセットになって伝えられているのは大変興味深いことです。

【お話その 6】千葉さま茶井戸（地図の 7）

今は落葉にかくれているこの湧き水ですが、四百年以上のむかし、うしろの山に千葉のお殿さまがお城（本佐倉城）を構えていらっしゃる頃は、それはそれはきれいな水がこんこんと湧いていました。その味は甘くてたいへんおいしかったので、お殿さまは毎日この水でお茶を点てるのを楽しみにしていました。それから「千葉さま茶井戸」と呼ばれるようになったということです。

【お話その 8】巖島の弁天さま（地図の 8）

ここは本佐倉根古谷という所です。この根古谷（根小屋）という変わった地名は山の上にお城のある城下を意味していますが、この弁天さまの前に広がる田の向こうの山は城山といって、戦国時代には千葉氏の本城がありました。ずっと昔（約 15 万年前）は、このあたりは広い広い海で、その名残りは上岩橋貝層として崖のあちこちに見られます。海が後退していくと印旛沼となり、千葉のお殿様の時代には中池と呼ばれる池になっていました。この池には美しい蓮の花が咲き、その中に小さな島があつて弁天さまが祀られていました。そしてお城に入るには、そちらの山（向根古谷）から城山に長い長い吊り橋がかかっていたとも伝えられていますが、これはさだかではありません。〔『佐倉市誌資料』第二輯、高橋三千男「本佐倉城築城伝説」『本佐倉城址保存会』第 1 号より〕

【お話その 9】摩三郎石一吉祥寺（地図の 9）

昔むかし蒙古の摩三郎という人が、この地に来て土を練り上げてこの石を作ったと伝えられています。不思議なことにこの石は掘っても掘っても掘りきることができないということです。（『佐倉風土記』より）

【お話その 10】弘法さまの乳の井一吉祥寺（地図の 9）

大同 2 年（807）、全国行脚の旅をしておられた弘法大師はこの地に立ち寄られま

した。村の人達が水に困っているのを知って、弘法大師が持っていた杖を地にさしますと不思議なことにきれいな水が湧きだしました。この水を飲むと出なかったお乳が出るようになりますので「乳の井」とよばれるようになりました。

※ 弘法大師が、水に困った人のために井戸や湧き水をつくったというお話は「弘法清水」「お大師水」「杖突き水」とよばれ全国に広く分布しています。

みすぼらしい旅の僧が、一椀の水を乞いました。わざわざ遠くから水を汲んできて飲ませたところ、その僧は弘法大師で親切な心に感謝して水を出してくれたというパターンが多いのですが、水を汲んでくるのを面倒がって洗濯水や米のとき水を出したために、その井戸の水がにごってしまったという土地もあります。

これらは大子（おおこみ）信仰を広めた人たちが、大師の偉大さを説いて歩いた結果このように全国にわたる伝説になったものとおもわれます。

この付近では酒々井町下岩橋の大仏頂寺の「弘法の滝」、佐倉市井野の「加賀清水」などがあります。

【お話その 11】 家康と無算和尚—清光寺（地図の 11）

清光寺二代目住職の峰誉（ほうよ）無算和尚は、三河国（今の愛知県）の大樹寺にいたとき、その地のお殿さまであった徳川広忠（家康の父）のお召しを受け、たびたびお話相手になっておりました。ところが広忠公は、不慮の死を遂げられたので、その歯骨をいただき関東のあちらこちらを回ったのち、この清光寺の住職になりました。本堂の南に広忠公の歯骨を埋め、塚を造り、朝夕、香華（こうげ）をあげて御供養していました。

天正 19 年（1591）、家康公が関東の領主となって、11 月に東金に鷹狩りに来られた時、無算和尚をお召し出しになりました。和尚が広忠公のお墓をお守りしていることを聞くと、大変喜ばれ、すぐさま清光寺においでになり、お寺には供養料として毎年五十石を寄付されたといえます。〔『佐倉風土記』、『印旛郡誌』より〕

【お話その 12】 鎌倉権五郎と桜の樹—五良神社（地図の 12）

この神社には、鎌倉権五郎景政という方が祀られています。平安時代の中頃、奥州（東北地方）で、阿部氏や清原氏の内乱が起きたとき（前九年の役、後三年の役）、中央の朝廷は、源義家を派遣してこの乱を平定しました。この戦の時、義家の家来の鎌倉権五郎景政は、左の眼を敵の矢に射抜かれてしまったのですが、矢を自ら抜くとその矢を敵に射返して殺したと言われています。

戦いが終わって都に戻る途中、権五郎は友である千葉氏に会おうとこの地を訪ねました。ここで馬を休め、桜の枝で作った鞭を地面に刺し、一息入れたのですが、鞭を忘れて立ち去ってしまいました。不思議なことに、やがて鞭から根が生え、葉が茂り、大きな桜の木になりました。

※ 鎌倉権五郎については、目洗い池や源五郎鮎など片目魚の伝説になって全国各地に残っています。特に、東北地方には、彼が射抜かれた目を洗った川や池に住む魚やカジカが、それ以来みんな片目になってしまったというところが多くあります。

権五郎伝説のもう一つに神を祀り、仏堂を建立し、不思議な霊威で神木を植えて塚を築いたなどの伝承があります。この五良神社の桜の樹の話は、こちらに属します。

それでは鎌倉権五郎は、なぜ神さまになったのでしょうか。権五郎の不思議な霊威ということもありますが、それ以前から、恨みを持って亡くなった人たちの祟りを恐れて、その霊を慰めるために御霊神社があり、その御霊と五郎とが結びついたとも考えられます。五良神社には、曾我五郎、佐倉宗五郎、仁科五郎などの人たちがそれぞれ祀られているところからも、御霊信仰と大きなかかわりがあったと思われます。なお、鎌倉権五郎は、歌舞伎の「暫」の主人公としても活躍しています。江戸の庶民にとって、強くて勇ましい権五郎は憧れの人になっていたのでしょうか。

【お話その 13】 五色の花の咲く桜—文殊寺跡（地図の 13）

この文殊寺には珍しいものがたくさんありました。大きな椎の木が十本ばかりありましたが、これには椎茸が沢山ありました。この椎茸は非常に香りが強く、笠の上は真っ黒で、裏は軸まで真っ白なのです。また、橘の木がありました。生椎茸が採れるのも、橘の木があるのも佐倉ではここだけでした。

さて、この寺の客殿の前に丸い塚があり、その上には三抱えもある桜の樹がありました。この桜は、鎌倉権五郎の挿した鞭から生えた桜のひこばえと伝えられていましたが、地面から最初の枝まで二間（3.6 丈）ばかりもあって、八方へ枝が伸び下って、その姿は半円形をしていました。高さは、十間（18 丈）ばかりもありまし



歌舞伎十八番「暫」

た。花卉は八重、一重、三重の大輪で、花の色は濃淡を交えて大層美しいものでした。世間の桜が終った頃、ようやく咲くのですが、遠目には、そばの松林よりもはるかに高く、山のように白く見えました。花の盛りには、虻がすさまじいほど来て、花の蜜を吸って辺りを飛び回り、その音はまるで千部のお経を読むようです。佐倉はもとより上総や銚子などからも花見に来るのですが、江戸か京か大阪にあるならば日本中に聞こえるほどの名木なのに、このような田舎にあって毎年咲き散ってしまうのは、大変に惜しいことだと書かれています。

〔『古今佐倉真佐子』、『佐倉風土記』より〕

【お話その 14】 天狗の話—文殊寺跡（地図の 13）

ある年の六月七日の朝五つ半（8時）ごろ、文殊寺の和尚さんが、小坊主に徳利を持たせて元町まで酒を買いにやりました。しかし、いくら待っても帰って来ないので、不審に思ってあちこち探し回りました。寺の前の松並木のところまで来ますと、小坊主に持たせた徳利が枝にかかっていたのですが、小坊主は見当りません。ますます不審に思って寺に帰って待っていますと、夕方になってようやく帰ってきました。和尚さんが叱りつけますと、小坊主は京都の祇園まつりを見て、今帰ってきたといいます。京まで行くには十四、五日もかかるのに、日帰りで行ってきたというとはなんとした大馬鹿者だと叱りつけておきました。

さて十日ほどたって、西国（関西）に行ってきた人が寺に来ました。よもやま話をするうちに、さる七日の京都の祇園まつりで、この寺の小坊主が棧敷にいるのを見かけたが、ずいぶん早く帰ってきたものだといいます。和尚は小坊主を呼び、祇園まつりの様子を詳しく尋ねたところ、その言うことが少しも間違っていない。どのようにして行ったのかと聞きますと、その日、徳利を持って松並木の中ほどまで行ったところ、向うから背の高い山伏がやってきて、今日は祇園まつりだが見物したくないかというのでついて行き、まつりを見てきたといいます。それを聞いた和尚さんは手を打ち、世の中には不思議なことがあるものだ。これこそ天狗の仕業にちがいないと、だれかれとなく話しましたので世間に知れ渡ったということです。

〔『古今佐倉真佐子』より〕。



〔酒々井の伝説を記録した文献〕

『古今佐倉真佐子』

元禄 14 年(1701)から享保 8 年(1723)まで、佐倉藩主であった稲葉正往、正知の二代につかえた百五十石の藩士渡辺善右衛門が著しました。

稲葉家が山城国（京都府南部）の淀に転封になったのに従い移り住みましたが、かつて住んだ佐倉を懐かしみ、佐倉城内をはじめとして武家屋敷、風俗、風習、動植物、伝説、藩内の事など自分の見聞きしたことを詳細に記述しています。この著は同時期に書かれた「佐倉風土記」が藩主に献じられた公式のものであったのに対し、あくまでも個人のものであったため、かえって生き生きとしたものになっています。

『佐倉風土記』

著者は元禄 14 年から享保 8 年まで、佐倉藩主であった稲葉正往、正知の二代に仕えた儒者の磯部昌言です。昌言は儒者であり歴史家でもありました。かれは稲葉侯に命ぜられ『総葉概録』『佐倉風土記』などを著しましたが、そのうち『佐倉風土記』は佐倉地方の風土、歴史、地理、民族などについて編述したもので、享保 7 年（1722）12 月に完成し、正知に献上されました。当時の佐倉地方を知るのに大変貴重な資料となっています。

『印旛郡誌』

大正 2 年、印旛郡役所の依頼によって、酒々井小学校の校長であった椎名忠治が著わしたものです。その当時できるかぎりの文献、資料を駆使したと序文にあるように、印旛郡内の各町村の風土、歴史、地理、民俗から人口、教育など多岐にわたっての詳細な記述がされています。